

## 統合型 HTP 法の研究展望を通じた臨床応用に関する一考察

武藤 翔太

### 要旨

心理臨床現場において用いられるアプローチの中で心理療法・心理アセスメントを包括したアプローチの一つとして描画法が挙げられる。その一技法として特定の課題画を描いてもらう課題法がある。課題法は対象者の心理アセスメントを行う場合に用いられやすく、医療・教育・司法現場など幅広く心理臨床現場でその実践と研究が進められている。その中の一つに統合型 HTP 法(以下, S-HTP)がある。本稿では描画法の歴史と今までの S-HTP 研究を概観することを通して描画法における S-HTP の臨床的意義を整理し、従来あまり重要視されてこなかった実施法とフィードバック(以下, FB)の視点からの有効性とその限界も含め、今後の臨床応用の可能性について考察した。まず Cook(1885)から始まった描画法の研究の歴史を概観し、当初より質・量的側面両方から検討されていることを明らかにした。このことから心理療法・心理アセスメントを内包したアプローチとして、現在の描画法の研究につながったことが考えられた。そして、児童発達・知的能力水準を測定するための描画法研究がどのようにしてパーソナリティの心理アセスメント(以下、査定描画法)として用いられ始めたのかを先行研究を通して明らかにした。さらに査定描画法の研究として彩色に関する研究、複数枚実施法に関する研究、FB に関する研究があることを先行研究によって提示した。一方で、S-HTP の研究が海外で発展しなかった背景の一つとして科学性への疑問を中心とした 1960 年代からの“投映法の危機”の時代があったことを示し、“投映法の危機”が生じた状況および批判への回答をまとめた。これに基づき、“投映法の危機”の時代が“投映法の悲劇”とも呼ぶべき描画法研究者・臨床家・批判者の間で生じた見解のずれであった可能性を提案した。その上で、国内での S-HTP 研究を概観し、①臨床的(精神病理表現)側面、②発達の側面、③他検査との基準関連、④評定方法・テストバッテリー法、⑤治療的側面、の 5 つの研究分野を中心になされてきていることを示した。以上の諸視点を踏まえて今後の S-HTP 研究の課題として①「統合性」の判定について、②「人」の簡略化表現に関する再検討、③彩色の有無と複数枚実施法による差異、④治療的側面を活かした FB 法などの臨床応用の検討、の 4 点があることを示し、筆者の研究成果も交えて展望について述べた。

キーワード：統合型 HTP 法、臨床応用、治療的側面

## 1. はじめに

心理臨床現場において用いられるアプローチの中で心理療法・心理アセスメントを包括したアプローチの一つとして対象者に描画作業を行ってもらふ描画法が挙げられる。描画法には多くの実施法（大きく分けて心理療法としてのものと心理アセスメントとしてのもの）がありその中の一つに特定の課題画を描いてもらう課題法がある。課題法は対象者の心理アセスメントを行う場合に用いられやすく、医療・教育・司法現場など幅広く心理臨床現場でその実践と研究が進められている。

本稿で取りあげる統合型 HTP 法（以下、S-HTP）は1枚の画用紙の中に『家』と『木』と『人』を入れた一枚の絵を描いてもらう課題法の一つであり、従来の各課題を一つ一つ別の画用紙に別描きする HTP 法（Buck,1948/1982）の変法の一つである。本稿では描画法の歴史と今までの S-HTP 研究を概観することを通して描画法における S-HTP の臨床的意義を整理し、従来あまり重要視されてこなかった実施法とフィードバック（以下、FB）の視点からの有効性とその限界も含め、今後の臨床応用の可能性について述べていく。

## 2. 描画法に関する研究

### 2-1. 描画法研究の萌芽

描画自体に関する研究は古くから美術的観点を中心に行われていたと推測される。近代で公となった研究の始まりとしては *Journal of Education* 誌に掲載された Cook（1885）の「On art teaching and child nature」が挙げられる。この研究は描画を通した児童の発達研究であり、その描画内容から統計的に児童の発達をとらえようとした研究である。その20年後には Kerschensteiner（1905）が約30万人の児童を対象に7年間の長期にわたって彼らの描画発達を統計的立場で考察した著書「*Die entwicklung der zeichnerischen Begabung*」を発刊している。続いて Goodenough（1926）は子どもが描いた人物画のその描かれた内容を通した知能測定の研究（Draw a Man Test；DAM）をまとめた著書「Measurement of intelligence by drawings」を発刊し、その翌年には Eng（1927）が自身の姪を対象に8年間、その描画発達を観察し続け描画行動も綿密に記録し、その描画を実証的に研究した著書「*Kinderzeichen vom ersten Strich bis zuden Farbenzeichnungen des Achtjahrigen*」を発刊している。このように言語能力が未発達な状態にあり、それまでは行動観察が中心となっていた児童の発達の程度や知的能力水準を客観的に計測するためのツールとして用いられ始めたのが描画法の研究の始まりであり、元々はその描き手のパーソナリティの諸特徴を明らかにする手法としては用いられていなかったことが考えられる。

Cook や Kerschensteiner, Goodenough は数量的視点である統計的な手法から横断・縦断的に児童発達・知的能力水準をとらえようとし、Eng は質的視点である縦断的な観察・記録から児童発達・知的能力水準をとらえようとしている。図らずも描画法の研究はその萌芽の時代から質・量的側面両方から研究が始まっているのが特徴であるといえよう。つ

まり、描画を単なる芸術作品・自己表現としての作品（art 的視点）にとらえるだけではなく客観的なアセスメントツール（science 的視点）にとらえ研究をし、かつ、その描画の有する art 的視点を残したまま実証的に研究をしているのである。そして、このことがその後の心理療法・心理アセスメントを内包したアプローチとしての現在の描画法の研究につながったことが推察される。

## 2-2. パーソナリティの心理アセスメントとしての描画法の始まり

前節で述べたように元々はパーソナリティの心理アセスメントとしては用いられていなかった描画法であったが、前述した Goodenough (1926) がその研究の中でパーソナリティ検査への応用の示唆を行っていた。ほぼ同時期に、スイス在住で職業コンサルタントをしていた Jucher が 1928 年ごろから職業コンサルタント業において求職者に obstbaum (果樹) を描かせ、その木の絵を「職業選択の診断に際して、一般の人にも、とりわけ被験者自身にも自ずと理解できるような、補助手段」(Koch, 1957/2010) として用い始めていた。その実践の中で「人格全体を、その存在の深い層において把握する必要性、もう少し控えめにいえば、せめて漠然と察知する必要性も当然感じている」と述べており、心理診断の補助手段、つまりは『パーソナリティ検査としての描画法』（以下、査定描画法）として描画法が用いられ始めたことが推測される。なお、後述する Koch, K. は Jucher, E. の弟子であり、1930 年代の実践のデータをまとめパーソナリティ検査としての理論を発展させ 1949 年にバウムテストに関する著書を出版している (Koch, 1957/2010)。

このように Goodenough や Jucher が査定描画法の示唆を行ってから Murray (1938) と Frank (1939) による「投射法 (projective method/projective techniques)」概念が提唱される。杉浦ら (2003) によると Frank は「パーソナリティを自らの私的世界 (private world) をもとに経験の構造化・体制化を行う力動的なプロセス」としてあらためて定義した上で、投射法はその「数々の特徴を包含しつつ統合体として生きている個人 (living total personality) がいかにして経験を構成するのかに焦点を置き、こうした一連のプロセスの元となっている私的世界を明らかにすることを目的としたパーソナリティ研究法である」と述べているという。筆者もこの見解に同意する。特に「統合体として生きている個人 (living total personality)」の「私的世界 (private world)」を明らかにするという視点は当時、画期的なものであったといえる。この視点は Freud, S. の防衛機制としての投影概念（無意識下での不快な感情・欲動を外界に投影する病理的な防衛）を越え、『意識／無意識』・『思考／感情』など内面を幅広く投射すること、さらには単純な断片的な諸特徴の総合でパーソナリティが形成されている訳ではないこと、個人的要因に加えて文化・社会的な影響も受けつつパーソナリティが形成・表現されていくこと、そしてそのような影響から離れた個人の反応様式が表れる場 (culture-free field) が必要とされることを示唆しているといえる。この視点へのパラダイムシフトにより、以下に述べるような後の査定描画法としての描画法が発展していったことが推測される。

査定描画法としてはまず、Buck (1948/1982) の 3 枚の画用紙にそれぞれ『家』と『木』

と『人』を別描きする HTP 法 (House-Tree-Person Technique) のスコアリングマニュアル(量・質的側面両方からの各課題の細部のスコアリング, HTP-IQ の算出, など)が *Clinical Psychology Monographs* 誌に掲載され, 翌年には *Journal of Clinical Psychology* 誌に 10 人分の HTP 法の事例報告が掲載された (Buck, 1949)。そして同じく 1949 年に『画用紙＝描き手の環境世界』とみなし, 別々の画用紙に男性・女性両方を描かせる人物画テスト (the drawing of the human figure) のマニュアル本が Machover (1949/1974) によって発刊される。さらには前述したように 1930 年代からの実践をまとめたバウムテストのマニュアル本の初版が Koch によって同年 1949 年に発刊された。バウムテストでは「投映の留め金」という表現が用いられ, 『木』という対象に無意識的に描き手の内的現実が映し出されることが「[バウムという] 対象は, [投影の] 留め金であり, 留め金がなければ, 何も掛けることができない [ように, バウムのような留め金がなければ, 内的現実もどこにも表現の足場を見出せない]」(Koch, 1957/2010) と反語的な表現をもって明記されていることが大きな特徴の一つであるといえる。そして, その 2 年後には家族の絵を描かせる家族描画法に関する報告がアメリカとフランスで発表されたのである (Hulse, 1951; Porot, 1952)。以上のようにその後, 多くの変法が開発されるきっかけとなる, 多くの査定描画法がこの時期に考案された。

さらに注目すべき点として, 同時期にイギリスの画家の Hill, A. がサナトリウムに入院していた仲間に芸術活動を勧めたことに端を発し 1951 年に「芸術療法 (art therapy)」という用語を初めて用い, その後, アメリカの Kris, E. や Naumburg, M. が力動志向的芸術療法 (psychodynamic art therapy) と名付け心理療法の一つ (主に絵画) として芸術的手法を用いることを確立させたことが挙げられる (伊藤, 2004; Klein, 2002/2004; 蘭, 2008 を参考)。このようにアメリカとイギリスにおいて同時期に芸術的手法が有する治療的要因に関心が向かっており, このことが上述した様々な査定描画法の発展に際しても相互的な影響を与えていたことが推察される。すなわち, この時期が査定描画法の萌芽から発展が著しい時期であり, 心理療法・心理アセスメントを内包したアプローチの一つとして描画法がとらえられ始めた時期であると考えられる。

### 2-3. 査定描画法に関する諸研究

以上のように研究と実践が始まった査定描画法であるが, その研究は多岐にわたる視点から行われている。

例えば描画においては密接な作業である彩色に関しての研究がある。査定描画法においても彩色に関しては様々な指摘があり, 詳しくは武藤 (2015) が述べているが, 感受性と情緒的側面が表れる可能性 (Payne, 1949), (他の査定法の中でも) 最も深層心理を映し出す (Hammer, 1958), 投影的 (中井, 1971), (描かれている内容を) より現実・具体化させる (中河原・小見山, 1981), 治療促進要因となる・表現の自由度を増す (藤田, 1993), などがその効果の代表的な内容として挙げられる。そして, 彩色の有無も含め, その実施方法に関してもバウムテストと樹木画テストにおける 1 枚だけでなく続けて複数

枚描かせる複数枚実施法 (Koch, 1957/2010; Bolander, 1977/1999; Castilla, 1994/2002; Stora, 1975/2011)・描き手の目の前で実施者が画用紙の中に枠を描き、その中に描画をしてもらう枠づけ法 (中井, 1974) を始め、課題に動きを加えるものや複数の課題を統合させるものなど多くの工夫がなされてきた。

そのようにアセスメント面の研究や実践が発展していった中、査定描画法においても他の心理アセスメント同様、FBに関する研究が Baker (1964) や Brenda et al. (1967) を皮切りにその治療的 (therapeutic) 活用を目指して始まっていった。描画法は「患者の気持ちが一番ストレートに伝わりやすい」(津川, 2015) とされ心理査定法・心理療法の技術を包括した心理臨床的アプローチの一つ (例えば岸本, 2015; 中井, 1970; 高橋, 2007, 2012) とされている。そのため、FB 研究の発展が望まれたことが推測される。しかし、他の心理アセスメントと比べ、査定描画法の FB 自体の研究は事例報告などが中心で十分に行われてきていない。実際に現在の FB 研究の中心となっている「治療的アセスメント」(Finn& Tonsager, 1997; Finn, 2007/2014) や「協働的個別的アセスメント (collaborative, individualized assessment)」(Fischer, 2000) においてもロールシャッハテスト (包括システム) や MMPI-2 などの心理検査がアプローチの中心となっている。査定描画法の FB の研究が十分に発展してこなかった背景には 1960 年代から始まった“投映法の危機”の時代の影響が大きいことが推察される。この影響の詳細については第 3 節で述べていく。

### 3. 国内外における S-HTP 研究の発展

ここで本稿にて取り上げる S-HTP について説明する。S-HTP とは前述した HTP 法から派生した技法であり「家と木と人を入れた一枚の絵を描いてください」と教示をし、横向きの A4 の画用紙に鉛筆 (HB) で一枚の絵を描いてもらう査定描画法である。『家』・『木』・『人』という 3 つの課題を統合させることにより解釈の幅を広げることや描き手への負担を減らすことなどを目的としている (三上, 1995)。この統合するという発想は Smykal & Thorne (1951) の事例報告が始まりの一つであると考えられる。彼らは一枚の画用紙の中に『家』と『木』と『人』を入れた modified H-T-P を利用し、HTP 法の開発者の Buck に分析を依頼しており、Buck もコメントをしている。つまり、HTP 法の開発当初から臨床現場では用いられていたことがこのことから示唆される。しかし、海外では積極的に研究されておらず、日本において比較的、臨床実践・研究が盛んな技法であるといえる。

海外にて modified H-T-P や S-HTP の研究が発展しなかった背景の一つとして前述したように 1960 年代から始まったいわゆる“投映法の危機”の時代の影響が考えられる。“投映法の危機”の時代における批判については Hertz (1970) によると、投映法そのものの基礎的な理論や仮説、その方法、さらには研究自体も不適切なものが多く信頼性に欠けている、という指摘やそもそも投映法自体が「there is no need for their being」(筆者訳：存在する必要がない) とみなす意見が中心となっている。例えば、当時主流であった行動主義派

は「**there is no need to explain human behavior**」(筆者訳：人の行動(の背景)を説明する必要はない)とし、行動の力動的な側面や原因に関心を向ける必要はないと述べ、当時急速に発達したコミュニティ心理学の観点からも、社会システムとコミュニティ組織に焦点を当てるべきであり精神内界のシステムを理解する必要はない、と批判されていたとされている。さらに、別宮・青木(1976)はこの Hertz の見解と同じく投映法を擁護する臨床家の Weiner の見解も交え、当時投映法は以下のような基本的批判を受けていたとしている。①心理診断用具は行動の予測の点で貧弱である ②テスト状況を行動の標本と見て、その中で被験者が何をなすか、ということに強調点がおかれるべきであり、そこから人格という仮説構成体を推論することは測定の実誤差を増すので不利益である ③心理診断による人格分類は、差別して烙印を押すこと(stigmatizing)であるから、ヒューマニズムに違反する ④診断カテゴリは時代後れの医学的モデルであり、現代の行動モデルでもなく心理学的モデルでもないから、われわれが使うべきものではない。

以上述べてきた諸批判に対しては極論に近い内容も含まれており、それぞれに対する回答は述べられているが、詳細は本稿では内容から逸れてしまうため割愛する。それらの回答の中でも重要な点としては例えば、Hertz(1970)は①過去の臨床家たち(筆者訳：In the past, clinical psychologists)が社会・文化要因を排した力動性に注意していたが今はそうでない点 ②パーソナリティの内的要因が多くある中、投映法だけでは行動の予見ができるわけではないこと、投映データと他のデータ(環境・社会・文化的要因など)を利用することで特定の行動(筆者訳：specific behavior)の説明がしやすくなることを明記している点 ③規準(norm)を対象者や時代に合わせて再評価していく必要性を認めている点、を挙げている。さらに Weiner も批判を受けていた象徴性を用いた解釈が測定の実誤差を起こす機会を増大させることを認めたと「この象徴的解釈という、心理診断の柔らかい下腹(soft underbelly)を批判者たちは探し出して、そこに彼らの最も鋭いほこ先を向ける」と批判者側の姿勢に対して批判をしている。そして「(心理テストと治療の関係は)治療のスピードを高めるためでなく、治療の計画を立てる上で重要なのである」と述べている(別宮・青木, 1976)。これらのことから推測するに、当時「投映法のみで対象者のパーソナリティ・その後の行動をすべて把握できる」と投映法を用いる臨床家が述べていると誤解されたことや、対象者への援助法の計画を立てる際に多元・多角的な見方が必要であったとした批判者たち自身が自身の依って立つ理論を重要視するという矛盾した批判をしたこと、投映法自体の研究法が実際に統制の面などで実験的に不適切であったこと、などから生じたお互いの見解のずれによる「投映法の悲劇」ともいえるべき事態が生じていたのではないかと筆者はとらえている。そのような中、ロールシャッハ・テストでは Beck が中心となりスコアリングの精緻化を目指したことにより諸批判に対応をし、現在のエクスナー法やロールシャッハ・アセスメントシステムにもつながる貢献をみせたことで発展していったことがうかがわれる。

一方で、HTP 法では主観性を払拭できず科学性を疑問視される批判に答えられなかった

ことから、臨床現場においては行われていたものの、研究は積極的に行われなくなってきたことが考えられる。このことの背景の一つには HTP 法における HTP-IQ の概念や実施方法の統一性（紙や描画道具の種類）に対する批判があったことが考えられる。例えば、1984 年には HTP 法の開発者である Buck が 1981 年に改定した HTP 法のマニュアルのエビデンスが臨床的要素に傾いており、統計的に弱い点を Buck 本人が記述していることに對し、痛烈な HTP 批判（Killan, 1984）が発表されている。その中で「科学性に乏しいのであるのならば、彩色行為や反対の性の人物を描かせるフェーズを持つことに対しての疑問（科学性の問題、臨床現場で行う際の労力の大きさ、など）」も提示されている。つまり、主観性や描き手・実施者間の関係性の影響により評価が変化しやすい描画法特有の個性記述的な特徴を有する HTP 法の法則定立的な側面や“正常者の基準”という描画法では本来明確に基準が設けられない点（弁別的妥当性への問題）など、ある種の理論的に脆弱な部分を中心に批判されていたのである。しかし、Buck（1949）が発表した事例報告を見ると明らかなように、当初より生活史なども交えたうえで量的分析（quantitative analysis）、質的分析（qualitative analysis）、印象（impression）という評価方法を行っている。そのような批判はあくまでも評価方法の一部分に対してのみであるにも関わらず、HTP 法全体への批判にまで拡大している可能性があることをここで述べておきたい。いずれにせよ、以上の批判のため、modified H-T-P や S-HTP のような HTP 法の応用技法に関する研究が発展しなかったことが考えられる。

ただし、日本ではそのような批判が積極的に生じず、HTP 法の研究は発展してきたことがうかがわれる。S-HTP は細木ら（1971）の多面的 HTP 法の中で部分的に用いられたのが最初であり、その後、医療・教育・司法現場と幅広い領域で用いられてきた。S-HTP 研究の主だったテーマとしては今までの S-HTP 研究のレビューを総括すると①臨床的（精神病理表現）側面、②発達の側面、③他検査との基準関連、④評定方法・テストバッテリー法、⑤治療的側面の 5 点が挙げられる（額額，2012, 2014；渋川・松下，2007 を参考）。

日本では前述したような臨床家のオリエンテーションの違いによる HTP 法ひいては投射法に対する海外のような批判が積極的に生じず、さらに S-HTP は事例報告から始まり次に統合失調症患者の精神病理表現を中心にその表現の特異さを厳密に数量的に研究する流れが生じたことにより発展してきたことが考えられる。しかし、その一方で、本邦では、描かれたサインの特異さのみから精神病理的側面を明らかにする研究が、当初から現在に至るまで多いことには留意する必要がある。というのも、その研究手法は海外では多くの批判を受けているからである。これは今後検討すべき点であろう。

さらに、今後検討を要する点として⑤の治療的側面が挙げられる。それは例えば直接的にその治療的側面を扱った研究数の少なさ（例えば、中西（1982）、井原（2004）など）に起因している。加えて、それらの研究は(1)宿題として継時的に描かせることにより得られた効果、(2)カウンセリング過程で継続的に描かることでその S-HTP を通して治療者や親が描き手の理解や治療プロセスの見立てに役立てるという治療ツールとしての効果を扱

った研究，であり心理アセスメントとして用いた S-HTP の FB 法や描画後質問 (Post Drawing Interrogation)，描画後の対話 (Post Drawing Dialogue) (高橋，2007，2012) を通しての描き手への治療効果を扱ったものでは決してないのである。つまり描き手 - 実施者という共視構造 (寺沢，2014) の中で描かれた S-HTP を扱って描き手と協働的に解釈を行うような前述した「治療的アセスメント」(Finn& Tonsager, 1997; Finn, 2007/2014) や「協働的個別的アセスメント (collaborative, individualized assessment)」(Fischer, 2000) の観点に沿った体系的な研究がなされていないのが現状であるといえる。

#### 4. S-HTP 研究の課題

以上のことを踏まえつつ，筆者の現段階での研究経過も交えて，今後の S-HTP 研究の課題について計 4 節に分けて述べていきたい。

##### 4-1. 「統合性」の判定について

まず，S-HTP の独自性でもある「統合性」の判定について検討をする必要が考えられる。「統合性」とは「全体的に一つのまとまった場面構成」(三沢，2014) がなされているかどうかという判定項目である。それは「確かな現実検討力や，課題に取り組む集中力，持続性，積極性，柔軟性，創造性などさまざまな能力が要求される」(三上，1995) 項目であり数多くある S-HTP の判定項目の中でも「総合的な評価項目として考えられなくもない」(三沢，2014) とされている重要な項目の一つである。この項目は三上 (1995)・三沢 (2014) の評定用紙や獨協医大式統合型 HTP 判定スケール (高良・大森，1994) などの評定スケールにおいても重要視されている。しかし，前述したように，この「統合性」の項目は描画法の判定に特有の問題でもある“主観性”の影響を受けやすい。そのため研究の際には“熟練した評定者”による“複数人判定”がその信頼性を担保するために用いられることが主流となっている。しかし，この方法ではいくつかの問題点がある。まず，その“統合性”の判定基準自体が明記されていない点が挙げられる。このこと背景としては国内での S-HTP 研究の第一人者である三沢 (三上，1995；三沢，2002，2014) の著書においても，その判定基準が明確に記されておらず例示 (三沢，2014) も近年に一部が示されているのみであり，その点の影響が大きいと考えられる。

S-HTP の「統合性」はロールシャッハ・テストという形態水準にあたり，エクスナー法やロールシャッハ・アセスメントシステムでは形態水準表を作成することにより問題の解消を図っているものの，S-HTP ではそのような対処はなされておらず“熟練した評定者”による“複数人判定”という方法しかとられていない。加えて，形態水準表のような目安を作成しようにも，その描画法としての自由度の高さや多次元的な評価 (全体評価，形式分析，内容分析) から作成することが極めて困難である。実際に研究者間での判定基準のばらつき (渋谷・松下，2007) が指摘されている中，異なった規準に基づいた結果による数量的な比較研究が行われるという“投映法の危機”の時代に批判を受けた流れ (信頼性の問題) が生じている。ロールシャッハ・テストの手法が分化しているように多くの判定



基準を設けることには意義があるものの、従来の研究はそれらとはことなり、判定の基準が違うのにも関わらず比較研究を行っている問題があるのである。さらに“複数人判定”を行ったとして、その信頼性が常に確立されるわけでは決してない。一部の“熟練した評定者”の判定に引きずられる可能性や逆に経験のなさから本来の判定とは異なった判定に流れる可能性も高いことが考えられる。「統合性」に相関を示す項目の報告（高崎，2011；三沢，2014）はあるものの、単純な細部の組み合わせで「統合性」が判定されるわけでは決してなく、そのような方法では実際に判定を行うときの助けや基準には決してなりえない。そのため、今後、まずは三沢の基準（三上，1995；三沢，2002，2014）に沿って、その統合性判定を困難にさせる要因を明らかにする研究が求められる。

#### 4-2. 「人」の簡略化表現に関する再検討

S-HTP はその統合過程という独自の過程から簡略化表現が多くなる性質を備えている。簡略化表現においては多くの HTP 法や S-HTP 関連の研究において「人」の簡略化についての問題点が指摘されている。S-HTP においては「人」の描写が最も難しいとされており（三上，1995）そのために、中学生頃から人の描写において簡略化される傾向があることが指摘されている。先行研究では、「人」の簡略化表現について、青年期特有のアイデンティティの不安定さ、不安の高さ、自信のなさ、防衛の強さなど様々な解釈が行われてきた（青山・市川，2006；三上，1995；清藤・空井，1998；空井・矢野，1992；高橋，1974）。しかし、額額（2014）は時代による変化を反映する指標である可能性を示唆し、従来の精神病理サインとする考えに疑念を呈している。つまり、描画法である S-HTP において描画サインのみでの単純な“正常 vs 異常”という見方をするものの危険性を示唆しているのである。この考えは前述した描画法における弁別的妥当性の問題にも直結したものであり、重要な検討点であるといえる。

そのため、あらためて青年期における「人」の簡略化表現が表している意味を検討していく必要があると考えられる。そこで筆者は協力者 78 名（平均年齢 21.3 歳，SD=0.71）の S-HTP を簡略化群と非簡略化群に分けて、その描画内容の差を数量的に検討した（武藤・高良，2013）。その結果、①両群にパーソナリティの大きな差は認められない。②簡略化を行える場合、柔軟なパーソナリティを備えている可能性があり、即座にネガティブな解釈を行うことは適切ではない。③簡略化が認められる S-HTP に対しては細部の解釈ではなく、全体的な課題の関連性を解釈していく必要がある。④現代青年の適応行動が人物像の簡略化として表現されており、それは、『積極的簡略化』と呼べるものである、\*という 4 点の示唆が得られた。これらの示唆から今後も「人」の簡略化表現においては時代背景や「人」以外の表現の質などに着目した、慎重な解釈・判断を行っていく必要性が示されている。

#### 4-3. 彩色の有無と複数枚実施法による差異

前述したようにバウムテストや樹木画テストをはじめとした多くの描画法において、彩色作業や複数枚実施法が用いられることがある。S-HTP においても彩色作業を利用した研

究や事例報告が数多くある（菊池，2000；渋川・松下，2007）。この流れに相応し、色鉛筆やクレヨンなど、用いる素材の差異によりもたらされる体験（情緒的、認知的など）・創作過程の差異がアートセラピーの観点から明らかにされている（市来，2009，2014）。しかし、それにもかかわらず、これらの素材を用いた理由について記述されていないことが多い。さらに、面接過程などでの継時的な複数枚実施法の報告はあるものの、心理アセスメントの場での複数枚実施法の報告はされていない。今後、S-HTPにおける彩色の効果と複数枚実施法の意義を検討していくことで S-HTP の心理アセスメントとしての有用性を高めるだけでなく、描画法が有する心理療法的アプローチなどの臨床応用につながる事が考えられる。

そこで筆者は Locke, J. の一次・二次性質の概念や Steiner, R. の色彩論、色彩象徴・色彩心理学研究などを通し、無彩色と彩色の性質の違いを示すことで、彩色の 2・3. で述べた解釈仮説や治療効果の発生機序を論じた（武藤，2015）。さらに、実際に S-HTP の無彩色版（以下、A）と彩色版（以下、C）の差異を描画表現と描き手の体験過程の違いから論じた（武藤・高良，2016b）。その結果、①従来の仮説を支持する結果が中心であった。しかし、有意差の出た項目は少なく変化は限定的な個所であるため、慎重な解釈を要する。②A と C を弁別して用いる必要性が示唆され A はより精神病理的な『査定面』、C はよりカタルシスを目指した『治療面』に適している。③A と C を両方描かせることによって、A において、『無彩色ショック』が生じる可能性があり、『無彩色ショック』の処理の仕方に注目することにより臨床応用の幅が広がる、という 3 点の知見が得られた。

そして、複数枚実施法においてはバウムテストの研究で 2 枚が適切（一谷ら，1985）と数量的変化の観点から述べられ、Stora（1975/2011）も最初の 2 枚を解釈において重視しているため、2 枚実施法に焦点を当て、研究を行った。2 枚実施法を実施した協力者（20 歳女性）のアセスメントおよび FB プロセスに焦点を当て、以下 6 点の考察が得られた（武藤，2016c）。①統合過程を支えるものは「ストーリー」であり、S-HTP は「内省→表現の段階」、「ストーリー生成の段階」、「語りの段階」という段階を経る。②S-HTP は「ストーリー」が生じやすく、描画法において重要視されている「語り」が描画後質問や描画後の語り（高橋，2007，2012）として統合過程の特徴と各課題・付加物間の象徴性と自由度の高さも相まって、より自然に豊かに表されやすくなる。③art 的視点（個別性、偶然性、意外性）でしか扱えない「ストーリー」も“比較”することによって science 的視点（一般性、必然性、法則性）から検討ができるようになる。このことにより解釈・FB を描き手・実施者間で“今ここ”（here and now）で協働的に作り上げることが可能となる。④1 枚目から 2 枚目への「ストーリー」の推移の中には中津（2015）や中津・関（2016）が樹木画テストで指摘しているように描き手の中にあるドミナント・ストーリー（支配的な人生観）が表され、それを実施者と共に振り返ることによって新しい意味性を獲得し、アルタナティブ・ストーリー（新しい物語）が生成されることがある。⑤描き手の動機づけを高め「ストーリーと語り」を生み出すためには、描き手・実施者間の関係性をより確かに

構築する必要がある。⑥1枚目の語りに耳を傾け内面の推移を推し量ることや1枚目の内容から描き手の病態水準を正確に見立てること、2枚目を描く前に描けそうかどうかということへの配慮を込めた確認を忘れずに行うことが望まれる。

さらにS-HTPの彩色と2枚実施法の効果を組み合わせた無彩色・彩色バッテリー法（武藤，2010，2013：以下，A・C法）を筆者はロールシャッハ・テストとの関連性や描画表現の変化を基に検討・開発した。その結果，武藤・高良（2016b）の結果も交え①AからCという施行順序では描き手の防衛的態度がとれ，本来備えているその人のパーソナリティや情意的側面が2枚目により端的に表現される。②CからAという施行順序では1枚目の絵の構成，ストーリーが2枚目に影響を与える。しかし無彩色ショックにより，2枚目には神経症的な側面が表れやすくなる傾向がある。同時に1枚目のストーリーを2枚目で発展させられることが精神的な健康度の高さを表す。③1枚目と2枚目の比較による解釈は変化が読み取りにくいに行いにくいのだが，上述した特徴を踏まえ，解釈を行うことにより，より信頼性の高い解釈が可能となる，という3つの仮説が生成された。

#### 4.4. 治療的側面を活かしたFB法などの臨床応用の検討

前節で述べた彩色や複数枚実施法に関する研究の課題も内包し，今後課題となるのが3節でも述べたS-HTPの治療的側面を活かしたFB法に関する研究である。前節での2枚実施法の研究（武藤，2016c）においても治療的プロセスが示唆されているが，筆者は通常の1枚実施法でのアセスメントおよびFBプロセスを明らかにするため，以下の研究を行った。自身の特徴・精神状態に関することや，友人・家族関係のことなどの明確な主訴を抱えた健常者（精神科・学生相談などの相談歴なし）の協力者9名（男性1名・女性8名，平均年齢18.7歳，SD=0.71）を対象に①インテーク面接+S-HTP実施，②①から2週間後をめどにFB，③②から1か月後以上先にフォローアップ，の3つの面接を個別にウェイトリングリスト方式で行った。③の段階で全員から程度の差はあれ主訴の改善の報告があり，②と③のやりとりを戈木クレイグヒル版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（戈木，2008，2013）で分析し，その結果を協力者にも検討してもらい，カテゴリー関連図を作成した。その結果を基に治療的なプロセスがどのように生じるのかを考察した。その結果，FB時では「《予想外の結果に対する評価・洞察》から《考えのパラダイムシフトによる驚きと納得》が生じるかどうか」，「《結果を受けてのより詳細な自己開示・新たなエピソードの開示》が生じるかどうか」が治療的なプロセスを経ているかどうかの目安となることが示された（武藤，2016b）。なお，フォローアップの結果は現在，分析・考察中であり武藤（2016b）の結果と交えて今後考察していきたい。

そして，これらの研究結果を踏まえた上で以下の3つの事例研究を行った。武藤（2016b）の研究の協力者であり「消えたい願望」を訴えた19歳女性のFBプロセス（武藤，2016a），精神科病院に単純型統合失調症疑いとして医療保護入院となった19歳女性に行ったA・C法のFB面接（武藤，2017：印刷中），精神科病院に摂食障害（制限型）で任意入院中であつた30代女性との入院中の言語面接内でのS-HTPによる「第三の対象」としての機能

の考察（武藤・高良，2016a）を通してFB時やその後の言語面接におけるS-HTPの治療的側面を活かした臨床応用について考察を行っている。今後も武藤（2016b）の結果を踏まえた上で「描画後の対話」（高橋，2007，2012）や間主観性などに着目し、「治療的アセスメント」（Finn& Tonsager, 1997 ; Finn, 2007/2014）や「協働的個別的アセスメント（collaborative, individualized assessment）」（Fischer, 2000）の観点に根差した「査定即治療」という両輪のアプローチをプロセス研究や事例研究を通して行っていくことが望まれる。つまり，今後のS-HTP研究においては描き手にとって納得のいく「正当な解釈」（三上，1995）の必要性が再強調されてきているのである。

## 5. おわりに

以上，描画法の歴史とS-HTPの研究の概観し，そして描画法におけるS-HTPの臨床的意義の整理・再検討を行い，今後の展望を述べてきた。繰り返しになるが，S-HTPは数多くある描画法と比べ，「統合」という独自の過程があるにも関わらず，その実施方法や治療的側面が積極的に検討されてこなかった技法である。“投映法の悲劇”といえるような事態に陥らないためにも，今後，描き手や様々な要因に注意し，正確な手順を踏んだ量的検討や臨床実践，事例研究を通してその臨床的意義を検討していくことが望まれる。

## 参考文献

- (1) 青山佳子・市川珠理（2006）．青年期におけるアイデンティティの感覚と統合型HTPの描画特徴．心理臨床学研究，**24**（2），232-237.
- (2) 蘭香代子（2008）．「描画」研究の歴史と考察——童話研究（5）．駒沢女子大学研究紀要，**15**，1-15.
- (3) Baker, G. (1964). A Therapeutic Application of Psychodiagnostic Test Result. *Journal of Projective Techniques and Personality Assessment*, **28**, 3-8.
- (4) 別宮哲・青木健次（1976）．投影諸技法の危機と今後の課題．ロールシャッハ研究，**18**，121-138.
- (5) Bolander, K. (1977). *Assessing personality through Tree Drawing*. Basic Books Inc. 高橋依子（訳）（1999）．樹木画によるパーソナリティの理解．ナカニシヤ出版．
- (6) Brenda, D.・Townes, M. A.・Nathaniel, N.・Wagner・Adolph, E. C. (1967). THERAPEUTIC USE OF PSYCHOLOGICAL REPORTS. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, **6**(4), 691-699.
- (7) Buck, J. N. (1948). The H-T-P Technique—A quantitative and qualitative scoring manual. *Clinical Psychology Monographs*, **5**, 1-20. 加藤孝正・荻野恒一（訳）（1982）．HTP診断法．新曜社．
- (8) Buck, J. N. (1949). The H-T-P technique. *Journal of Clinical psychology*, **5**(1), 37-74.
- (9) Castilla, D. De.(1994). *Le test de l'arbre-Relation humaines et pblèmes actuels*. Paris : Manson. 阿部恵一郎（訳）（2002）．バウムテスト活用マニュアル——精神症状と問題行動の評価．金剛出版．
- (10) Cook, E. (1885). On art teaching and child nature. *Journal of Education*, **8**(198), 12-15.
- (11) Eng, H. (1927). *Kinderzeichnen vom ersten Strich bis zuden Farbenzeichnungen des Achtjahrigen*. Zeitschrift für angewandte Psychologie. Beih. 39.

- (12) Finn, S. E.・Tonsager, M. E. (1997). Information-Gathering and Therapeutic Models of Assessment—Complementary Paradigms. *Psychological Assessment*, 9, 374-385.
- (13) Finn, S. E.(2007). *In Our Client's Shoes—Theory and Techniques of Therapeutic Assessment*. Lawrence Erlbaum Associates. 野田昌道・中村紀子（訳）（2014）. 治療的アセスメントの理論と実際——クライアントの靴を履いて. 金剛出版.
- (14) Fischer, C. T. (2000). Collaborative, Individualized Assessment. *Journal of Personality Assessment*, 74(1), 2-14.
- (15) Frank, L. K. (1939). Projective methods for the study of personality. *Journal of Psychology*, 8, 389-413.
- (16) 藤田裕司（1993）. へび象徴技法に関する臨床的研究（2）——他技法との比較. 大阪教育大学紀要 第IV部門, 42（1）, 137-146.
- (17) Goodenough, F. L. (1926). *Measurement of intelligence by drawings*. Yonkers-on-Hudson, NY. :World Book.
- (18) Hammer, E. (1958). *The Clinical Application of Projective drawings*. Springfield, Illinois, U.S.A. :C. C. Thomas.
- (19) Hertz, M. R. (1970). Projective Techniques in Crisis. *Journal of projective Techniques and Personality Assessment*, 34(6) , 449-467.
- (20) 細木照敏・中井久夫・大森淑子・高橋直美（1971）. 多面的 HTP 法の試み. 芸術療法, 3, 61-67.
- (21) Hulse, W. C. (1951). The emotional disturbed child draws his family. *Quart. J. child Behavior*, 3, 152.
- (22) 市来百合子（2009）. 描画検査場面における画材の違いによる創作過程の変化. 甲子園大学紀要, 37, 153-160.
- (23) 市来百合子（2014）. ETC 理論からみた描画法における「素材」と創作過程——考案者の表現空間に対する意図の検討から. 奈良教育大学紀要, 63（1）, 171-179.
- (24) 一谷彊・津田浩一・山下真理子・村澤孝子（1985）. バウムテストの基礎的研究〔I〕——いわゆる「2枚実施法」の検討. 京都教育大学紀要 Ser. A, 67, 17-30.
- (25) 井原成男（2004）. Anorexia Nervosa に施行した連続 S-HTP. 小児の精神と神経, 44（2）, 139-147.
- (26) 伊藤俊樹（2004）. [31]芸術療法. 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕（共編）. 心理臨床大辞典[改訂版]. 培風館, 391-396.
- (27) Kerschensteiner, D. G. (1905). *Die entwicklung der zeichnerischen Begabung*. Munchen: C. Gerber.  
([https://archive.org/details/dieentwicklung00kers\\_0](https://archive.org/details/dieentwicklung00kers_0) より ; 2017/02/15 参照)
- (28) 菊池道子（編）（2000）. 現代のエスプリ 390 心の病の治療と描画法. 至文堂.
- (29) Killan, G. A. (1984). House-Tree-Person technique. *Test critiques*1, 338-353.
- (30) 岸本寛史（2015）. バウムテスト入門——臨床に活かす「木の絵」の読み方. 誠心書房.
- (31) 清藤理恵・空井健三（1998）. 人物画からみた現代大学生の心的特性の変遷. 中京大学文学部紀要, 33, 97-108.
- (32) Klein, J, P. (2002). *L'art-therapie*. Paris:Universitaires de France. 阿部恵一郎・高江洲義英（訳）

- (2004). 芸術療法入門. 白水社.
- (33) Koch, K. (1957). *Der Baumtest: der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel 3. Auflage*. Bern: Hans, Huber. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男 (2010). バウムテスト [第3版] —— 心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究. 誠心書房.
- (34) 額額千晶 (2012). S-HTP 研究の文献検討——研究テーマの多様化を中心に. 名古屋大学大学院 教育発達科学 研究科紀要 心理発達科学, **59**, 101-109.
- (35) 額額千晶 (2014). S-HTP における現代青年の描画特徴の研究——新たな描画指標の構築に向けて. 名古屋大学. 博士 (心理) 論文. (未公刊).
- (36) Machover, K. (1949). *Personality projection in the drawing of the human figure*. Springfield, Illinois, U.S.A.: C. C. Thomas. 深田尚彦 (訳) (1974). 人物画への性格投影. 黎明書房.
- (37) 三上直子 (1995). S-HTP 法——統合型 HTP 法による臨床的・発達のアプローチ. 誠信書房.
- (38) 三沢直子 (2002). 描画テストに表れた子どもの心の危機——S-HTP における 1981 年と 1997~99 年の比較. 誠信書房.
- (39) 三沢直子 (2014). S-HTP に表れた発達の停滞. 誠信書房.
- (40) Murray, H. A. (1938). *Explorations in personality*. New York: Oxford University Press.
- (41) 武藤翔太 (2010). 統合型 HTP 法における無彩色・彩色バッテリーに関する探索的研究——描画の変化とロールシャッハテストとの関連から. 明治大学心理社会学研究, **6**, 89-100.
- (42) 武藤翔太 (2013). 統合型 HTP 法における無彩色・彩色バッテリー法の検討——バッテリー施行による描画内容の変化に着目して. 日本心理臨床学会第 32 回大会論文集, 331.
- (43) 武藤翔太 (2015). 描画法における彩色(chromatic)の projection と治療効果の発生機序に関する一考察——Steiner, R. の色彩論や色彩象徴を通して. 文学研究論集, **44**, 61-78.
- (44) 武藤翔太 (2016a). 統合型 HTP 法によるフィードバック・プロセスの検討——「消えたい願望」が緩和された女子大学生とのフィードバックを通して. 日本心理臨床学会第 35 回大会論文集, 180.
- (45) 武藤翔太 (2016b). 統合型 HTP 法のフィードバック・プロセスの検討——グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析を通して. 日本描画テスト・描画療学会第 26 回大会論文集, 48.
- (46) 武藤翔太 (2016c). 統合型 HTP 法における 2 枚実施法の有効性の検討——「ストーリーと語り」の視点から. 文学研究論集, **46**, 印刷中.
- (47) 武藤翔太 (2017). 統合型 HTP 法のフィードバックに関する一考察——「連続施行法と彩色」の効果をみた事例を通して. 臨床描画研究, **32**, 印刷中.
- (48) 武藤翔太・高良聖 (2013). 青年期の統合型 HTP 法における記号・シルエット化された「人」の表現に関する一考察——「家」・「木」との関連性に注目して. 日本芸術療法学会誌, **42** (2), 42-51.
- (49) 武藤翔太・高良聖 (2016a). 統合型 HTP 法の「第三の対象」の機能についての考察. 日本芸術療法学会第 48 回大会論文集, 28.
- (50) 武藤翔太・高良聖 (2016b). 統合型 HTP 法の無彩色版と彩色版の差異の検討——表現内容および描き手の体験の差異に着目して. 日本芸術療法学会誌, **47** (2), 82-94.
- (51) 中河原通夫・小見山実 (1981). Synthetic House Tree Person 法に表現される描画パターンの研究.

- 芸術療法, 12, 45-51.
- (52) 中井久夫 (1970). 精神分裂病者の精神療法における描画の使用—とくに技法の開発によって作られた知見について—. 芸術療法, 2, 77-90.
- (53) 中井久夫 (1971). 描画をとおしてみた精神障害者—とくに精神分裂病における心理的空間の構造. 芸術療法, 3, 37-51.
- (54) 中井久夫 (1974). 枠づけ法覚え書. 芸術療法, 5, 15-19.
- (55) 中西昭憲 (1982). 継続的 Synthetic House-Tree-Person method の治療的意義. 芸術療法, 13, 23-31.
- (56) 中津達雄・関薫 (2016). 樹木画テストに見られる物語性について. 臨床描画研究, 31, 88-103.
- (57) Payne, J. T. (1949). Comments of the analysis of chromatic drawings. *Journal of Clinical Psychology*, 5(1), 75-76.
- (58) Porot, M. (1952). Le dessin de la famille, Exploration par le dessin de la situation affective de l'enfant dans sa famille. *Pediatric*, 7, 1.
- (59) 戈木クレイグヒル滋子 (2008). 実践グラウンデッド・セオリー・アプローチ—現象をとらえる. 新曜社.
- (60) 戈木クレイグヒル滋子 (編) (2013). 質的研究法ゼミナール—グラウンデッド・セオリー・アプローチを学ぶ. 医学書院.
- (61) 渋川瑠衣・松下姫歌 (2007). 統合型 HTP 法に関する研究の展望—「統合性」・「遠近感」・「人と家・木との関係付け」に着目して. 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 6, 52-66.
- (62) Smykal, A.・Thorne, F. (1951). Etiological studies of psychopathic personality: II. Asocial type. *Journal of Clinical psychology*, 7(4), 299-316.
- (63) 空井健三・矢野智 (1992). HTPP 法における現代大学生の心的特性について. 中京大学文学部紀要, 27, 1-22.
- (64) Stora, R. (1975). *LE TEST DU DESSIN D'ARBRE*. Paris :Jean-pierre delarge. 阿部恵一郎 (訳) (2011). バウムテスト研究—いかにして統計的解釈にいたるか. みすず書房.
- (65) 杉浦京子・香月菜々子・鋤柄のぞみ (2003). 投映描画法テストの動向と展望. 日本芸術療法学会誌, 34 (1), 5-37.
- (66) 高橋雅春 (1974). 描画テスト入門—HTP テスト. 文教書院.
- (67) 高橋依子 (2007). 描画テストの PDI によるパーソナリティの理解—PDI から PDD へ. 臨床描画研究, 22, 85-98.
- (68) 高橋依子 (2012). 臨床に活かす描画. 臨床描画研究, 27, 64-83.
- (69) 高良聖・大森健一 (1994). 精神分裂病者における統合型 HTP 描画変化と予後との関連. 臨床精神医学, 23 (4), 485-497.
- (70) 高崎蘭 (2011). 統合型 HTP と自我の統合機能. 臨床心理学研究, 9, 67-81.
- (71) 寺沢英理子 (2014). 心理療法場面における描画の活用. 臨床描画研究, 29, 66-82.
- (72) 津川律子 (2015). 検査結果のフィードバックに対する考え方. 高橋依子・津川律子 (編). 臨床心理検査バッテリーの実際. 遠見書房, 199-209.